紀伊國熊野岬

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月一日甲寅、寅一點、親王○宗尊自關本御出、未一刻出御固瀬宿、御迎人々、參會此所、○中略路次自稲村崎經由比濱鳥居西到下馬橋、暫扣御輿、○下略

〔太平記十〕稲村崎成干潟事

新田義貞逞兵二萬餘騎ヲ卒シテ、廿一日○元弘三年五月ノ夜半計ニ片瀬腰越ヲ打廻リ、極樂寺坂ヘ打蒐給フ、○中略義貞馬ヨリ下給テ、甲ヲ脱テ海上ヲ遙々ト伏拜ミ、龍神ニ向テ祈誓シ給ケルハ、○中略仰願ハ内海外海ノ龍神八部、臣ガ忠義ヲ鑒テ、潮ヲ萬里ノ外ニ退ケ、道ヲ三軍ノ陣ニ令開給ヘト、至信ニ祈念シ、自ラ佩給ヘル金作ノ太刀ヲ拔テ、海中ヘ投給ケリ、眞ニ龍神納受ヤシ給ケン、其夜ノ月ノ入方ニ、前々更ニ干ル事モ無リケル、稲村崎俄ニ二十餘丁干上テ、平沙渺々タリ、横矢射ントヽ構ヌル數千ノ兵船モ、落行鹽ニ被誘テ、遙ノ澳ニ漂ヘリ、不思議ト云モ無類、○中略江田、大館、里見、鳥山、田中、羽河、山名、桃井ノ人々ヲ始トシテ、越後上野、武藏、相模ノ軍勢共、六萬餘騎ヲ一手ニ成テ、稲村崎ノ遠干潟ヲ、眞一文字ニ懸通テ、鎌倉中ヘ亂入ル、

〔日本書紀十一仁德〕三十年九月乙丑、皇后遊行紀國、到熊野岬、卽取其處之御綱葉此云二葉盾一始婆一而還、

〔日本書紀一神代〕一書曰、○中略其後少彦名命、行至熊野之御碕、遂適於常世鄕矣、

〔書紀集解一神代〕按延喜式、有熊野坐神社、在出雲國意宇郡、知熊野崎亦在于其地、

出雲國熊野岬

〔筑前國續風土記十四遠賀郡〕山鹿岬

筑前國山鹿岬

山鹿村の北一里に岩屋村あり、其北なる出崎を岩屋崎といふ、是山鹿の岬なり、むかし此邊をすべて山鹿と云けるなり、

〔日本書紀八仲哀〕八年正月壬午、幸筑紫、○中略既而導海路、自山鹿岬廻之入岡浦、

鐘岬

〔筑前國續風土記十六宗像郡〕鐘の御崎鐘崎町

織幡の神のある山の出崎を云、昔三韓より大なるつりがねを渡せしに、此濠にしづめり、故に鐘